

みを思い人間を思わない彼の宗教的関心が思想的に徹底されていくたびに、その重要性もますます大きいものとなっていった」(152頁)。

ここにきて、予定説にたいする「二つの道」が、ルターとカルヴァンの道として対置され、それぞれが「体験によってえられた(erlebt)(S. 92)」ものと「思索によってえられた(erdacht)」ものという特性によって区別され、対比されていることがわかる。そして、この二つの対比的特性は、「二つの道」のそれぞれの成立の基礎であるとともに、それぞれが歴史上辿った道とのあいだに因果関係があるというのがウェーバーの言わんとするところであろう⁶⁾。すなわち、ルターの場合、予定説が弱まっていったのは、それが体験にもとづいたもので、論理的徹底性を欠いていたからであり、それと対比して、カルヴァンの場合、その予定説は思索によってえられたものであるから、「思想的に徹底されていくたびに、その重要性もますます大きいものとなっていった」といわれるのである。カルヴィニズムの予定説のこのような性格を、別の箇所では「壮大な一貫性」(grandiose Geschlossenheit)(217頁、S. 124)、「比類のない首尾一貫性」(ganz einzigartige Konsequenz)(219頁、S. 128)と表現している。

三

このように、予定説の成立と歴史的経過をめぐって、ルター(およびルター派)の場合と対比してカルヴァン(およびカルヴァン派)の立場を提示したウェーバーは、ただちにカルヴァンの予定説の説明に移る。といっても、予定説そのものの叙述ではなく(それはすでに「ウェストミンスター信仰告白」からの引用によってなされているから)、予定説の含意、あるいは予定説の基礎概念の説明である。つまり、「思索によってえられた」といわれるカルヴァンの予定説が、どのような概念から思索によって論理的に導き出されたものであるかを提示してみせるのである(152頁～154

頁)。それは次のようなことばで始められている。

「人間のために神があるのではなく、神のために人間が存在するのであって、あらゆる出来事は——したがって、人々のうちの小部分だけが救いの祝福に召されている、というカルヴァンにとって疑問の余地のない事実もまた——ひたすらいと高き神の自己栄化の手段として意味をもつにすぎない」。

ここには、人間を含めてすべてのものが神のため、神の栄光のために存在しているという神と万物との根本的關係と、それが神の選び(予定)の前提だということが言われている。それでは、万物とそのような関係にある神とはどんな存在であるか、——「人間の理解を絶する超越的存在」、ただひとり「どんな規範にも服さない」自由なものである。そのようなものとしてこの神は、その「絶対に自由な決意」によって、「永遠の昔から各人の運命を決定し、宇宙のもっとも微細なものにいたるまですでにその処理を終え」ておられる。こうウェーバーは言う。つまり彼によると、カルヴァンは、被造物から無限に隔たった超越者、何物にも制約されない絶対者という神観念から出発して、その神の被造物にたいする絶対的決定として「神の選び(予定)」を考えたというのである。そうすると、「われわれの個人的運命のもつ意味は見るべからざる神秘に蔽われており、それを究めようとするのは不可能でもあるし、身の程を知らぬことでもある」ということになり、さらに、「われわれが知りうるのは、人間の一部分が救われ、残余のものは永遠に滅亡の状態に止まるということだけ」であって、「人間の功績あるいは罪過がこの運命の決定にあずかると考えるのは、永遠の昔から定まっている神の絶対に自由な決意を人間の干渉によって動かしようと見なすことで、あり得べからざる思想である。……神の決定は絶対不変であるがゆえに、その恩恵は、これを神から拒絶された者には獲得不可能であると同様に、これを神からうけた者には喪失不可能なのだ」という結論になるのは当然である。

6) この「二つの道」を安藤英治氏は予定説が「歴史上辿った二つの方向」と解し、客観的な力の作用にもとづく救済観が弱まる方向(ルター)と強められる方向(カルヴァン)を指すとして、詳しく論じている(前掲書、272頁、291-292頁、313頁注19)が、それはむしろ二つの基本的態度の違いから出てきた結果であるから、「二つの道」はその因果の全体を含むものと解すべきであろう。